

令和七年度入学試験問題（前期日程）

国語

初等教育教員養成課程 人文・社会教育プログラム（国語系科目）
中等教育教員養成課程 中等教育プログラム 国語専攻

注意事項

- 一 解答はすべて別紙解答紙の指定の箇所に記入すること。
- 二 解答紙には、必ず受験番号を記入すること。

令和 7 年度一般選抜（前期日程）入学試験問題

問題訂正

プログラム名 初等教育教員養成課程
人文・社会教育プログラム （国語系科目）
中等教育教員養成課程
中等教育プログラム 国語専攻

◎科目名 国語

〔二〕 9 ページ 問一 問題文 下線部を訂正

（誤）傍線部 A 『個別性と一般性のギャップの問題』 の

（正）傍線部 A 『「個別性と一般性のギャップの問題」』 の

解答するにあたっては、次のことに注意せよ。

ア 送り仮名・仮名遣い・文字・記号の表記については、標準的慣用表現によること。

イ 句読点は一文字に数える。

ウ 楷書で書くこと。

【一】 次のそれぞれの問いに答えよ。

問一 ①～⑩のカタカナの部分は漢字で、漢字の部分は読みをひらがなで記せ。

- | | |
|------------------------|--------------------|
| ① サミダレの季節がきた。 | ② 魏・呉・蜀の力がキンコウを保つ。 |
| ③ パーティで、牛飲バシヨクをしてしまった。 | ④ 今年はコトサラに寒い。 |
| ⑤ 制服はタイヨされたものだ。 | ⑥ 宴会でおシャクをして回る。 |
| ⑦ 発表会で成果をヒロウする。 | ⑧ 給料で生活費を賄う。 |
| ⑨ 扇の要が壊れた。 | ⑩ 曇天の日が続く。 |

問二 二つの熟語が対義語になるよう、空欄にあてはまる漢字として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

- | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-----|-----|-----|-----|
| ① □重 ↑ ↓ 軽率 | ② □食 ↑ ↓ 粗食 | ③ 唯物 ↑ ↓ 唯□ | | | | |
| ア 他 | イ 心 | ウ 悪 | エ 鈍 | オ 美 | カ 形 | キ 慎 |

問三 三つの空欄に共通する漢字を入れて熟語を完成させよ。次の選択肢から最も適切な漢字を一つ選び、記号で答えよ。

- ① ☐ 瑞^{ずい}・発^{はつ}☐・不^ふ ② ☐ 減^{げん}・☐ 次^じ・☐ 増^{ぞう} ③ 逸^{いつ}☐・☐ 衣^い・☐ 臼^{うす}

ア 漸 イ 火 ウ 入 エ 祥 オ 脱 カ 滅 キ 顕

問四 空欄に適切な漢字を補って、慣用句・ことわざを完成させよ。

- ① 大学では心☐一転、がんばる。 ② この大きさでは☐に短したすきに長した。

- ③ 苦情を言ったが取りつく☐もなく無視された。

問五 次の和歌を読んで、以下の①②の問いに答えよ。

世の中よ 道こそ A 思ひ入る 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

- ① 空欄Aに、形容詞「なし」をふさわしい形にして入れよ。

- ② 傍線部「なる」は助動詞である。その助動詞の活用表を完成させよ。活用形がない場合には、解答欄に「○」を記すこと。

問六 次の漢文を書き下し文にせよ。

- ① 猶^ホニ 水^{ミヅ} 勝^{ツガ}ハ 火^ヒ。
② 何^{ナニ} 楚^ソ 人^{ヒト} 多^{オホキ} 也^ヤ。

問七 次の①～⑤の各問いに答えよ。

① 北畠親房によって書かれた作品を、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 栄花物語 イ 愚管抄 ウ 増鏡 エ 太平記 オ 神皇正統記

② 「東海道四谷怪談」の作者を、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 近松門左衛門 イ 井原西鶴 ウ 上田秋成 エ 鶴屋南北 オ 十返舎一九

③ 小林多喜二によって書かれた作品を、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 海に生くる人々 イ 施療室にて ウ 坑夫 エ 太陽のない街 オ 蟹工船

④ 「春眠曉を覚えず」で有名な「春曉」の作者を、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 孟浩然 イ 杜甫 ウ 柳宗元 エ 李白 オ 王維

⑤ 諸子百家の中で法家に分類される人物を、選択肢から一つ選び、記号で答えよ。

ア 孟子 イ 孔子 ウ 韓非子 エ 老子 オ 墨子

【二】 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

言葉は意味をもっている。

え？ 何をもっているって？

「意味」

すると、一方に言葉があり、他方に「意味」と呼ばれる何ものかがあって、言葉はそれを「もっている」というわけだ。ちょうど、「富士山」という語にあの山が対応しているように。では、「鳥」という語には何が対応しているのか。

あそこに一羽のカラスがいる。あれは鳥だ。ならば、「鳥」という語にはあれが対応しているのか。あれが鳥の意味なのか？ いや、もちろんあれだけが「鳥」の意味であるはずがない。ならば、もう一度問おう。「鳥」という語に対応する、「意味」と呼ばれる何ものかとは何なのか。言葉の意味とは何か。この手に負えない難問を考えるために、まずは「鳥」のような一般名詞を考えてみたい。それは、一般名詞が扱いやすいからではない。逆に、一般名詞において「言葉の意味」という哲学問題がとりわけ鋭利に立ち上がってくるからにほかならない。しばらく、その問題へと引き込まれるにまかせてみることにしよう。

一般名詞は「富士山」のような固有名詞と異なり、一般性をもつ。「鳥」は特定の対象（あのカラス）を意味するのではなく、鳥一般を意味している。だが、鳥一般など、どこに在るのだろうか。外を歩いてみよう。そこそこ鳥たちがいる。しかし、どれをとっても「鳥一般」ではない。この承知のことと思うが、鳥一般にはダチョウもペンギンも含まれるのである。そんな鳥一般に、私は出会ったことがない。

「鳥」の意味は鳥たちの集合だ、と言われるだろうか。だが、そうだとすれば、それはこれから生まれてくる鳥たちも含む無限集合となる。私は、鳥一般にも出会ったことがないが、鳥の無限集合にも出会ったことがない。夕空にムクドリが群れをなしていても、たかだか数万羽である。無限集合は人間の認識可能なものではない。それはただ鳥の意味を理解している人だけが想定しうる理論的指定物にすぎない。

この問題を↑「個別性と一般性のギャップの問題」と呼ぼう。一般名詞は一般性をもつ。他方、われわれが現実に出会うものたちはすべて個別なものではない。鳥一般が空を飛んでいるわけではないし、鳥の無限集合が梢にとま^{こすえ}つていることもない。「鳥」の「意味」と呼ばれう

る何ものかを、世界の中に見出すことはできないように思われる。

世界の中に見出すことができないとき、ひとはしばしば「心の中」に居場所を求める（心の中も世界の一部だということを忘れて）。「鳥」という語の「意味」と呼ばれうる何ものかは、心の中にあるのではないか。

例えばこんなふうに考えるかもしれない。「言葉は、一般観念の記号とされることによって一般的となる。」ジョン・ロック（注1）の議論である。続けよう。「そして観念が一般的となるのは、その観念から時間と場所の状況が切り離され、またそれ以外にもその観念をあれこれの個別のものとするような他の諸観念がすべて切り離されることによる。この I という仕方によって、観念は一つ以上の個体を代表しうるようになるのであり、各々の個体が（一つの呼び名で表わされるような）その種のもつとされるのは、それがこの抽象観念と一致するからにほかならない。」（『人間知性論』）ロック独自というより、むしろ素直な考え方と言えるだろう。われわれが出会うのはある時ある場所にいる個別の対象だけである。それらは大きかったり小さかったり、黒かったり茶色だったりする。泳ぐものもいるし、走るものもいる。こうしたさまざまな性質を捨象して、われわれは個別の鳥たちから鳥の一般観念を抽象する。そして「鳥」という語はその一般観念を意味する、というわけだ。だが、これがそれなりに説明になっているような気がするのは、たんに説明が明確でないからにすぎない。二つの問題を順に論じよう。

まずロックが一般観念（あるいは抽象観念）と呼ぶものが決定的にあいまいである。一般観念をある種のイメージとして考えてみよう。一般的鳥のイメージを思い描いてみていただきたい。思い描けるだろうか。すべての鳥にあてはまるような一般的な鳥のイメージ。

ロックに従えば、「鳥」の意味を理解するとは、鳥の一般観念を把握し、それを「鳥」という語に結びつけることである。鳥の一般観念を参照することによって、われわれは「鳥」という語を適切に使えるようになる。それを参照すれば、白い鳥も茶色い鳥も青い鳥も、スズメもカラスもカモもダチョウもペンギンも適切に「鳥」と呼び、コウモリや飛行機やスーパーマンは「鳥じゃない」と適切に言える、そんな一般的な鳥のイメージ。ジョージ・バークリ（注2）はロックを批判して「そんなものありはしない」と言った。私もそう思う。

ロックはおそらく一般観念をイメージのようなものとして捉えるのは誤解だと言うだろう。だとすれば挙証責任（注3）はロックの側にある。イメージではないとしたら、それはどのようなものなのか。大きくも小さくもない、そして大きくも小さくもある、そんな鳥の一般観念とは、何なのか。残念ながらロックからその答えを引き出すことはできない。

第二の批判に移ろう。百歩譲って、一般観念なるものがあるとすると、それはイメージではないとしても、心の中に形成される何かである。だが、なんであれ、心の中に生じるものもまた、それ自体特定の時刻に生じる II なのではかありえない。これはなかなか伝わりにくい論点であるから、きちんと説明しようと思うが、言いたいことは、世界で出会うものに対して個別性と一般性のギャップを認めるのであれば、心の中をもちだしたところで何も変わりはないという点にある。理由は、心の中も世界の一部だからである。

ウォーミング・アップから入ろう。例えば昨夜部屋にいて悲しみの感情をもったとする。この時この場所で生じたこの感情は、個別的な特定の悲しみである。「悲しみ」という語はけっしてこの時のこの感情だけの名前ではない。もしこの感情だけに名前をつけるとすれば、それは「富士山」や「ジョン・ロック」のような固有名ということになり、例えば「野矢茂樹の悲しみ三〇八九番」のような名前になるだろう。「悲しみ」はこうした個別事例をすべて含み、かつ、これからも私に、そして他の人たちに生じるだろう無数の悲しみを含んでいる。押さえておいてほしいのは、この事情は「鳥」の場合とまったく同じだという点である。鳥たちは眼前に現われ、悲しみは心の中という違いはあるとしても、語の一般性と事例の個別性に関する事情は、何ひとつ違いがない。

ロックは、「鳥」は鳥の一般観念の名前であると言う。そして一般観念は、よく分からないものであるにせよ、心の中に生じる何ものかである。だとすると、それはある場所である人の心の中に生じるものである。例えばいま私が鳥の一般観念を心の中に生じさせたとする。それは悲しみの場合と同様に、個別の体験であり、例えば「野矢茂樹の鳥の一般観念三七六三四番」といった固有名をつけることのできるようなものである。そうであるならば、「鳥」という語の意味がこの体験であるはずがない。これまでの三七六三三回分も、これから生じるであろうものも、他の人たちに生じるものも、すべて鳥の一般観念である。では、「鳥」という語の意味は何なのか。鳥の一般観念の体験のすべて？ それでは再び無限集合になってしまう。

かといって、それら無数の「鳥の一般観念体験」を抽象して、より一般的な鳥の一般観念を抽象するのだ、というのでは無限後退であり、馬鹿げた冗談でしかない。

「一般観念」などというよく分からない用語を使い、心の中などというよく分からない領域に逃げ込むから、よく分からなくなって、騙されちゃうのである。しかし、呼吸を整えて、頭を冷やして考えてみれば、心の中をもちだしたところで個別性と一般性のギャップの問題は何ひ

とつ変わりが無いということは、明白ではないだろうか。

こうした議論から示唆されてくるひとつの考え方は、「鳥」という語には意味がないとするものである。いや、この言い方は誤解を招く。もっと正確に言おう。

ロックに代表されるような考え方はこうであった。言葉にはその「意味」と呼ばれる何ものかが結びついている。言葉の意味を理解するとは、それに結びつけられているその何ものかを把握することにはかならない。われわれはその何ものかを参照することによって、その言葉を適切に使用するのである。そこで、いまやこの考え方を否定する方向が示唆される。（ここで言われているような意味での「意味」なるものなど、ありはしない。そう言いたい。この考え方を、大森荘蔵（注4）の用語を借りて「無意味論」と呼ぶことにしよう。

ワイトゲンシュタイン（注5）もまた、無意味論の側に立っていた。彼は批判の相手をこのように描写している。

われわれが一般語をあれこれの仕方を用いるだろうということが一般観念の存在から帰結する、という考え。われわれは、語の使用とは糸巻きから糸を引き出すようなものだという誤った考えをもっている。それはすべてそこにあり、ただ巻かれてあるものをほぐすだけなのだ、と。かくしてわれわれは、ある語使用は一般観念に従っており、別の語使用は従っていない、と語る。『ワイトゲンシュタインの講義』

無意味論は、こうした「言語使用の源泉としての意味」という考えを否定するのである。

われわれは前回（注6）、規則のパラドクスを見た。実は、規則のパラドクスはワイトゲンシュタインが「言語使用の源泉としての意味」という考えを攻撃するために用意した議論であり、おそらくは最強の議論である。無意味論の観点から、もう一度規則のパラドクスを見てみよう。

ある生徒に「+2」という規則を教える。教師は100以下の数で具体的にやってみせ、生徒はその後を続ける。ここで起こっていることをわれわれはこう説明したくなるだろう。「+2」という規則を与え、具体例を示し、それによって生徒に「+2」という規則の意味を理解させたのだ。ひとたび正しく規則の意味を理解したならば、それからはその意味に従って適切に規則を適用していきけるはずだ、と。ロックならば「+2」の観念と言いかもしれない。

よろしい、その生徒が「+2」の観念(意味)なる何ものかを把握したとしよう。そして教師に「1000+2は？」と尋ねられる。だが、この問題に答えるのに、「+2」の観念は役に立つのだろうか。「+2」の観念ないし意味なるものがどのようなものであれ、「1000+2」等々の具体的な問題の答えのすべてがそこに書き込まれてあるわけではないだろう。具体的な問題は無限にある。いくら心でも(そして脳でも)無限個の答えを収納することはできない。だとすれば、その生徒は、「+2」の観念をいまこの問題に対して適用しなければならぬ。そして彼は自分なりに考え、自信をもって、「1000+2は1004」と答えるのである！

観念ないし意味なる何ものかを形成したとしても、さらにそれを個別の場面に適用しなければならぬ。ならば、われわれと同じ観念や意味を把握しつつ、なおそれをわれわれとは違う仕方で適用してしまう人を考えることができる。例の生徒はまさにそうして「1004」と答えたのである。そして、同じ観念や意味を違う仕方で適用しようということは、観念や意味はそこから唯一の適用を紡ぎ出す「適用の源泉」ではありえないということである。われわれは観念や意味に導かれて言葉を使用するのではない。かくして、ワイトゲンシュタインはこう結論する。

規則と事例を通じ、間接的な仕方では諸君がある人の心に意味を生み出していると考えるのは、幻想なのだ。(前掲書)

なるほど、「言葉は意味をもつ」と言う。だが、何をもっているというのか。鳥の一般観念であれ、「+2」の観念であれ、^D「言語使用の源泉としての意味」なるものは幻想ではない。具体例を通して言葉の使用を学ぶとき、けっして子どもは具体例の背後に潜む「意味」なる何ものかを探り当てるのではない。では、どうするのか。どうもこうもない。具体例を示され、「以下同様」と言われ、以下同様に行っていく。それだけのことである。ここに「意味」のごときものは余計ではない。もちろん、ここにはまだ論じるべきいくつもの問題がある。しかし、なによりもだいじなことは、そしてなによりも難しいことは、この表層に立ち止まり、さらなる深みを探ろうとしないことである。そこに、『哲学探究』が開いた新たな言語観を見せてくる。

(野矢茂樹『語りえぬものを語る』所収、講談社学術文庫、二〇二〇、から引用した。設問の都合により本文の一部を改変している。)

(注1) ジョン・ロック…イングランド出身の哲学者。

(注2) ジョージ・バークリ…アイルランド出身の哲学者。

(注3) 挙証責任…主張のために、証拠を提示する責任のこと。

(注4) 大森荘蔵…日本の哲学者。

(注5) ウィトゲンシュタイン…オーストリア出身の哲学者。

(注6) 「前回」とは、元の文章において、出題箇所より前に書かれている部分を指している。「計算の解答に+2をした数を正解とする規則」のこと。

問一 傍線部A『個別性と一般性のギャップの問題』の具体的内容として最も適切なものを次の選択肢の内から一つ選び、記号で答えよ。

- ① 一般名詞である「山」という語は、「鳥」という語とは異なり、無限集合とはならないという問題。
- ② 固有名詞である「富士山」という語は、一般名詞との関係性の中でしか「意味」を持つことができないという問題。
- ③ 固有名詞である「ダチョウやペンギン」のイメージは、世界の一部である心の中には存在しないという問題。
- ④ 一般名詞である「鳥」という語のイメージは、個体がさまざまな性質を持つているために、提示することが困難であるという問題。

問二 傍線部B『そんなものありはしない』と言った。私もそう思う。』について、筆者がこのように述べた理由を「そんなもの」が指す内容を明らかにしながら一〇〇字程度で説明せよ。

問三 空欄Ⅰ・Ⅱに入る表現として最も適切なものを次の選択肢の内からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

空欄Ⅰ ①象徴 ②具体 ③抽象 ④分化

空欄Ⅱ ①個別的 ②一般的 ③観念的 ④規則的

問四 傍線部C『ここ』で言われているような意味での「意味」の具体例として示されている部分を、本文中より一三字で抜き出して答えよ。

問五 傍線部D『言語使用の源泉としての意味』なるものは幻想でしかない。』について、筆者がこうに述べる理由を「1000+2は1004」と答える例を用いて一二〇字以内で説明せよ。

問六 本文の内容や表現の特徴についての説明として、適当なものを次の選択肢の内から二つ選び、記号で答えよ。

①本文中ではワイトゲンシュタインの主張とジョン・ロックの主張が対比されており、筆者はワイトゲンシュタインの主張に賛同する形で論を進めている。

②筆者は、一般名詞と固有名詞を対比することで、固有名詞であれば「意味」を持つことが可能であることを段階的に主張している。

③筆者は、前半部分では一般観念の存在が否定された理由を説明し、後半部分ではその理由の矛盾点について指摘している。

④筆者は、規則を教えることが不可能であるという「無意味論」の立場に立っており、何かを教えることが無意味であることについて言及している。

⑤筆者は、「意味」は個別具体の事例から生じるものであり、一般観念として頭に思い描くイメージのような「意味」は実際には存在しないことを述べている。

⑥筆者は、言葉の「意味」について追究するよりも、言葉が用いられた個別の場面に着目することの重要性について述べている。

【三】 次の文章は、『源氏物語』「浮舟」巻である。薫は大君に思いを寄せるが、大君は亡くなつてしまふ。薫は、大君の異母妹で、大君によく似た浮舟と關係を持つようになる。ところが、その浮舟は匂宮と密通してしまふ。薫大將は、それを知らずに浮舟のもとを訪れるが、浮舟は密かに關係を持った匂宮のことを思い、苦しんでいる。読んで、あとの問いに答えよ。

月もたちぬ。かうおぼし焦らるれど、おはしますことはいとわりなし。かうのみものを思はば、さらに(A)えながらふまじき身なめりと心細さを添へて嘆きたまふ。

大將殿、すこしのどかになりぬるころ、例の、忍びておはしたり。寺に仏など拝みたまふ。御①誦經せさせたまふ僧に物賜ひなとして、夕つ方、ここには忍びたれど、これはわりなくもやつしたまはず、烏帽子、直衣の姿いとあらまほしくきよげにて、歩み入りたまふより、恥づかしげに、用意ことなり。

女、『いかで見えたてまつらむとすらん』と、空さへ恥づかしく恐ろしきに、あながちなりし(C)人の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの(I)人に見えたてまつらむを思ひやるなむ、いみじう心憂き。『我は、年ごろ見る人をも、みな思ひかはりぬべき心地なむする』とのたまひしを、げに、その後、御心地苦しとて、いづくにもいづくにも、例の御ありさまならで、御修法など騒ぐるを聞くに、また、いかに聞きて(A)おぼさむ』と思ふもいと苦し。

この(U)人、はた、いとけはひことに、心深く、なまめかしきさまして、久しかりつるほどの怠りなどのたまふも言多からず、「恋し悲し」と下り立たねど、常にあひ見ぬ恋の苦しさを、さまよきほどにうち(B)のたまへる、いみじく言ふにはまさりて、「いとあはれ」と人の思ひぬべきさまをしめたまへる人柄なり。艶なる方はさるものにて、行く末長く人の頼みぬべき心ばへなど、こよなくまさりたまへり。『思はずなるさまの心ばへなど漏り聞かせたらむときも、なのめならずいみじくこそあべけれ。あやしう、うつし心もなう思し焦らるる(E)人をあはれと思ふも、それはいとあるまじく軽きことぞかし。この人にうしと思はれて、忘れたまひなむ心細さは、いと深うしみにければ……』思ひ乱れたる気色を、『月ごろに、こよなうものの心知りねびまさりにけり。

つれづれなる住み処^ゝのほどに、思ひ残すことはあらかじかし』と見たまふも、心苦しければ、常よりも心とどめて語らひ^(C)たまふ。
「造らする所、^②やうやうよろしうしなしてけり。一日^(カ)なむ見しかば、ここよりはけ近き水に、^(B)花も見たまひつべし。三条宮も近きほどなり。明け暮れおぼつかなき隔ても、おのづからあるまじきを、この春のほどに、さりぬべくは渡してむ」と思ひてのたまふも、『かの人の、のどかなるべき所思ひまうけたりと、昨日^{きのふ}ものたまへりしを、かかることも知らで、さ思すらむよ』、とあはれながらも、そなたになびくべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におぼゆれば、我ながらも、うたて心憂^{こころう}の身やと思ひつづけて泣きぬ。

「御心ばへの、かからでおいかなりしこそどこかにうれしかりしか。人のいかに聞こえ知らせたることかある。すこしもおろかならむ心ざしにては、かうまで^③参り来べき身のほど、道のありさまにもあらぬ^dを」など、朔日ごろの夕月夜に、すこし端近く臥してながめ出だしたまへり。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身のうさを嘆き加へて、かたみにもの思はし。

〔源氏物語〕より。設問の都合で本文の一部を改変している。）

(注)○言ふにはまさりて……「心には下ゆく水のわかかへり言はで思ふぞ言ふにまされる」(『古今和歌六帖』)をふまえた表現。
○三条宮……薫の住居。○過ぎにし方のあはれ……薫は大君(故人)の異母妹浮舟を介して、かつて片思いをしていた大君を思い出す。

問一 傍線部①「誦経」、②「やうやう」、③「参り来べき」を、現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで答えよ。

問二 二重傍線部 a～d の「ぬ」の、それぞれの文法的意味の組み合わせとして、最適なものを選び、記号で答えよ。

- | | | | | |
|---|----------|----------|----------|----------|
| ア | a 助動詞・完了 | b 助動詞・強意 | c 助動詞・完了 | d 助動詞・打消 |
| イ | a 助動詞・強意 | b 助動詞・完了 | c 助動詞・打消 | d 助動詞・強意 |

ウ	a ナ変動詞活用語尾	b 助動詞・打消	c 助動詞・強意	d 助動詞・完了
エ	a 助動詞・完了	b 助動詞・強意	c ナ変動詞活用語尾	d 助動詞・打消
オ	a 助動詞・強意	b ナ変動詞活用語尾	c 助動詞・完了	d 助動詞・打消
カ	a 助動詞・完了	b 助動詞・打消	c 助動詞・強意	d ナ変動詞活用語尾

問三 傍線部(ア)～(エ)「人」で、句宮を指すものを全て選び、記号で答えよ。

問四 二重傍線(A)「えながらふまじき身なめり」、(B)「花も見たまひつべし」を現代語訳せよ。

問五 点線部「あべけれ」を、例にならつて品詞分解し、文法的に説明せよ。用言については活用の種類と活用形を答え、動詞は上に加えて、活用の行も答えよ。助動詞については意味も答えること。

(例)	玉	／	ぞ	／	散	り	／	け	る
(文法的説明)	名詞		係助詞		動詞・ラ行四段・連用形		助動詞・過去・連体形		

問六 傍線部(カ)「なむ」は、ここでは係り結びにすべき語が、結びの形をとらずに、次に文章を続けている。

(一)本来、係り結びの結びとなるべき語は次のどれか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア しか イ に ウ べし エ なり オ む

(二)また、(一)に該当する語を、本来の結びの形に直せ。

問七 傍線部(A)「おぼさ」、(B)「のたまへる」、(C)「たまふ」、は、誰から誰への敬意か。人物を、人物群からそれぞれ一つ選び記号で答えよ。なお、解答は重複してもかまわない。

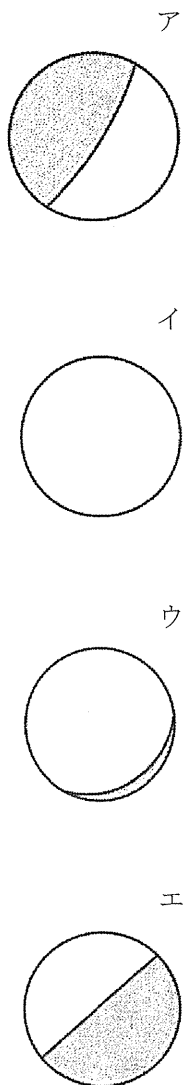
人物群

ア 薫 イ 匂宮 ウ 浮舟 エ 僧 オ 大君 カ 作者(語り手) キ 読者(読み手)

問八 薫からいやな女と思われ、嫌われてしまったら、と苦悩する浮舟を、薫はどのように見て取っているか。該当する箇所の一文を、二十四字で抜き出せ。

問九 薫は浮舟を迎えるため新しい屋敷を造成している。その一方で匂宮は浮舟に何と言っているのか。該当する箇所を十五字で抜き出せ。

問一〇 「朔日ごろの夕月夜」で、出ていた月の形として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。



※ 白いところは月の光る部分、色のついているところは月の影の部分にあたる。

〔四〕

次の文章を読んであとの問いに答えよ。

管仲^{くわんちゆう}有^リ疾^{やまひ}、桓公^{くわんこう}往^{キテ}問^{ヒテ}之^ニ、曰^ク、「仲父^{ちゆうふ}病^{メリ}矣^①、将^{シテ}何^ニ以^テ教^ス寡人^ニ。」管仲

对^{ヘテ}曰^ク、「願^{ハクハ}君^②之^③遠^{ザケンコトヲト}。」易牙^{えぎ}、豎刁^{じゆうてう}、常之巫^{じやうしふ}、衛公子啓方^{ゑいこうしけいほう}。」公曰^ク、

「易牙烹^ハ其子^ニ以^テ慊^{あきたラシム}寡人^ヲ。」猶尚^{なほ}可^キ疑^フ耶^ト。」对^{ヘテ}曰^ク、「人之情^{ザルルニ}非^レ不^レ愛^セ

其子^ノ也^ヲ。其子之忍^ノ、又何^タ有^ニ於君^ニ。」公又曰^ク、「豎刁^ハ自宮^{じきゆうシテ}以^テ近^{ツク}

人^ニ。猶尚^{なほ}可^キ疑^フ耶^ト。」对^{ヘテ}曰^ク、「人之情^{ザルルニ}非^レ不^レ愛^セ其身^ヲ也。其身之忍^ノ、又何^タ

有^ニ於君^ニ。」公又曰^ク、「常之巫^ハ審^ニ於死生^ニ、能^ク去^ニ苛病^ニ。」猶尚^{なほ}可^キ疑^フ

耶^ト。」对^{ヘテ}曰^ク、「死生^ハ、命也。苛病^ハ、天也。君不^{シテ}下^ジ任^シ其命^ニ、守^ラ其本^ヲ、而恃^{タム}常

之巫^ヲ。彼将^ニ以^テ此^ヲ無^レ不^レ為^サ也。」公又曰^ク、「衛公子啓方^ハ事^ニ寡人^ニ十

五年^{ナリ}矣^{スルモ}。其父死^{スルモ}而不^{ヘテ}敢^リ歸^リ哭^セ。」猶尚^{なほ}可^キ疑^フ耶^ト。」对^{ヘテ}曰^ク、「人之情^{ザルルニ}非^レ不^レ

愛^セ其^ノ父^ヲ也。其^ノ父^ヲ之^レ忍^ブ、又何^タ有^カ於^{ラント}君^ニ。公^ニ曰^ク、「諾^{ダクト}」管仲死^シ、尽^ク逐^フ之^ヲ。
食^セ不^レ甘^{ウマカラ}、宮^ヲ不^レ治^{マラ}、苛^コ病^{コリ}起^リ、朝^ヲ不^レ肅^{ナラ}。居^{ルコト}三^ニ年^ヲ、公^ニ曰^ク、「仲父不^ニ亦^モ過^フ乎^ニ」。
於是^ア皆^タ復^{シテ}召^{シテ}而^{シテ}反^ス。

明^{メイ}年^{ネン}、公^{コウ}有^リ病^{ビョウ}。常^{ジョウ}之^ノ巫^ウ相^{サウ}与^ユ作^ス乱^{ラン}。塞^セ宮^{キョウ}門^{モン}、築^キ高^{コウ}牆^{キョウ}、不^レ通^サ人^ヲ。公^{コウ}求^{ムルモ}飲^{イン}不^レ得^デ。衛^ヱ公^{コウ}子^シ啓^キ方^{ハツ}以^テ書^{シヨ}社^{シャ}四^シ十^{ジュ}下^カ衛^ヱ。公^{コウ}聞^キ乱^{ラン}、慨^{ガイ}然^{トシテ}嘆^{ナミダ}、涕^{テイ}出^デ、曰^ク、「嗟^ア乎^ア、聖^{セイ}人^{ジン}所^ハ見^ル豈^ニ不^レ遠^{カラ}哉^ト」。

〔『智囊』卷五による。設問の都合により、返り点・送りがなを省略している部分がある。〕

(注) ○管仲……春秋時代の政治家。斉の桓公に仕えた。桓公は彼を尊んで仲父と呼んだ。○桓公……名宰相管仲の補佐を得て春秋時代を代表する有力な君主の一人となった。○易牙……桓公に仕えた料理人。○豎刁……桓公に仕えた宦官。○常之巫……呪術や祈祷などを行って桓公の病気を治療した家来。○衛公子啓方……もとは衛の太子であったが、地位を捨てて桓公に仕えていた。○慊……満足する。こころよく感じる。○自宮……自らの意志で宦官になること。○審……くわしく知る。○苛病……重いやまい。○守其本……本分を守りつとめる。○恃……たのむ。あてにする。○哭……人の死を悲しんで声をあげて泣くこと。○薨……貴人の死をいう。○牆……かき。かきね。○書社四十……書社は村里の戸数と人口のこと。書社四十とは、およそ千戸の家を言う。○慨然……深くうれい悲しむ様。

問一 二重傍線部 a ～ c のよみを、送りがなも含めてすべてひらがなで記せ。

問二 本文中において、波線部⑦「遠」とほぼ同じ意味で使われている語を、次の(1)～(5)から一つ選べ。

- (1) 往 (2) 忍 (3) 逐 (4) 通 (5) 下

問三 傍線部①を、返り点にしたがって書き下し文にせよ。

問四 傍線部②について、本文中の人名を適宜補いながら現代日本語で解釈せよ。

問五 傍線部③を、(甲)書き下し文にせよ。また、(乙)現代日本語で解釈せよ。

問六 傍線部④の説明として最も適切なものを、次の(1)～(5)の中から選んで記号で答えよ。

- (1) 桓公の病状から判断して死去する日を予想して常之巫が語った言葉。
- (2) 自分がいなくなった後の桓公の運命を占って管仲が常之巫に伝えていた言葉。
- (3) 桓公を絶望させようとして易牙と豎刁が常之巫に語らせた偽りの言葉。
- (4) 桓公を守っていた将兵が反乱を起こすことを常之巫が予言して語った言葉。
- (5) 誰の手によって桓公が暗殺されることになるか常之巫が占った言葉。

問七 傍線部⑤のように述べる理由について、本文の内容をふまえて簡潔に説明せよ。